

溝田在庵

が幾通あるか、そして、多くの其の御書は如何なる位置にあるものかなどを、研究するのも、後學の吾等が、所至に至るの最も、近道ではなからうかと思ふ、故に吾人は、先師の諸釋中より、最蓮房上人の生處得道等を圖示して見よう。

[ 39 ]

舊所囑宗	天台宗	天台宗	天台宗	天台宗	天台宗	天台宗
本門戒受時	文永九年 四月八日	文永九年 四月八日	文永九年 四月八日	文永九年 四月八日	文永九年 四月八日	文永九年春

右に依つて其の大躰を知ることが出来るであらう、更に上人の性格行狀の概要を、諸書に示す所より次の考へを述べて見よう。

體質は虚弱 宗祖御授與の祈禱送狀、撰法華經送狀を推して見ると、體は怯弱であつたらしい。

性格は持戒堅固であつて、信行的嚴肅主義の人であつたらしい。

學問は天台の圓頓戒系統の人らしい、それは、宗祖が最蓮房に御授與の御書の多くが、觀心的種囑の者の多さを見て、圓頓戒系統の人である如く推

せられる。聖祖との往復。學術的、宗教的には觀心的傾向である、それは、後に示す圖に依て知られる事であらう。

上人の事業。結縁後は宗祖に隨ひ、常に自己の信行を進め、且つ、内治に勉められし如くである。上人の態度。總べての行動に於て、守勢的であつたらしい。次に宗祖が、上人に授與遊ばされた御書事、調査して見ると左の如くである。

書	名	授與ノ年月	録	内	外	遺	文	縮	冊
生死一大事血脈抄	文永九年二月	外十三	廿二	十二	一	7	4	2	
草木成佛口決抄	文永九年二月	外十三	十四	十二	四	7	4	5	

得授職人功德法門抄	文永九年四月	外十七 <small>八</small>	十三 <small>十七</small>	8	4	2
最運房御返事	文永九年四月	外十二 <small>卅五</small>	十三 <small>十二</small>	8	3	6
祈禱抄	文永九年	内十六 <small>四十二</small>	十四 <small>一</small>	8	9	4
祈禱經送狀	文永十年正月	内卅八 <small>十九</small>	十四 <small>廿一</small>	9	1	4
諸法實相抄	文永十年五月	他二 <small>十一</small>	十四 <small>五十三</small>	9	5	8
當體義抄	文永十年	内廿三 <small>九</small>	十五 <small>十</small>	9	8	8
當體義送狀	文永十年	外三 <small>十四</small>	十五 <small>廿一</small>	1	0	0
立正觀抄	文永十一年十二月	内卅八 <small>一</small>	十六 <small>卅七</small>	1	0	6
立正觀送狀	文永十二年二月	内卅八 <small>十五</small>	十七 <small>四</small>	1	0	8
十八圓滿抄	弘安三年十一月	外十八 <small>卅三</small>	廿九 <small>廿三</small>	2	0	0

以上の如くである、即ち、文永九年に五通、文永十年に四通、文永十一年に一通、文永十二年に一通、建治二年より弘安二年迄、都合四箇年の間は一通も無い、それは、上人が宗祖に、隨行して居られたからであらう、佐渡赦免後の上人は、身延在の下山に居られた、弘安三年に一通で、都合十二通である、其内で録内が五通、録外が六通、他受用が一通である。

次に右の御書は御遺文中に於て、如何なる地位に在るものであるかと云ふに、総べてが、法義に關した御書であつて、而も、觀心的傾向の御書が多い、故に、御遺文中の主要の地位にあるものである、

## 精 進

川 口 智 隨

私は日蓮大上人の御遺文及諸先哲の訓言に依りまして精進と云ふ事に就て御話を致します精進とは如何なる事であるかと申しますれば御經文の中にも勇猛精進と御説きになりまして撓まず屈せず進むのか精進であると御教誡にあつて居るのであります徳川家康は人の一生は重き荷を負て遠き道を行くか如し急げば必ずつまづく事あり。と申されて居ります吾々人生と云ふ者は恰度重い處の荷物を負つて遠い道を行く様を物であつて急いだなら必ず重荷を負つて居る事あれば其の目的地に達

する事は出來ずして途中でつまづいて倒れてしもうのである百里の道も一步より初つて居るのであるから一步一步と歩みを運ばなければ遠い目的には達す事は出來ないのであります又『孔子曰譬へ如<sup>レ</sup>爲<sup>ル</sup>山<sup>カ</sup>未<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>簣<sup>ニ</sup>止<sup>ム</sup>ハ吾<sup>カ</sup>止<sup>ム</sup>也譬へ如<sup>レ</sup>平地雖<sup>レ</sup>覆<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>簣<sup>ニ</sup>進<sup>ム</sup>ハ吾<sup>カ</sup>往<sup>ク</sup>也』と申され學問と云ふ者は山を作る様な物である今一簣を以て其の山が出來上ると云ふ時にあつて止めると云ふのは自分か止めるのである地を平にするのに未だ一簣を覆したただけであつてもそれを撓まず屈せずして進んで行くと云ふのは即ち自分か進のである故に學問をするにも淺きより初めて撓まず屈せず勇猛精進の心を以て孜々として吾々の目的地に達せねばならんであります禮記の中には嘉肴ありと雖も食はざれば旨き事を知らず至道なりと雖も學ばざれば其の道を知らずと云ふ事があります如何に山海の珍味で味か宜しいと申しても食べて見なければ其の美味さは解りません又何程結構なる道かありまして勉強をいたしませんければ其の道を得